

平成30年度病害虫発生予報第8号

平成30年9月5日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区 分	農 作 物 名	病 害 虫 名	発生時期	予想発生量
普通作物	ダイズ	ハスモンヨトウ	—	平 年 並
果 樹	ナ シ	黒斑病	—	やや多い
		黒星病	—	平 年 並
		クワコナカイガラムシ	やや早い	平 年 並
		シンクイムシ類	—	平 年 並
		ハダニ類	—	やや多い
	カ キ	炭疽病	平 年 並	平 年 並
	ブドウ	べと病	—	やや少ない
		チャノキイロアザミウマ	—	平 年 並
		ハマキムシ類	平 年 並	平 年 並
	共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ）	カメムシ類	—	多 い
野 菜	ネ ギ	黒斑病	平 年 並	やや多い
		ネギハモグリバエ	—	平 年 並
		ネギアザミウマ	—	やや多い
	ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	—	やや多い
	ナガイモ	炭疽病	平 年 並	平 年 並
		ナガイモコガ	—	やや少ない
		ハダニ類	—	平 年 並
	キャベツ、 ブロッコリー	べと病	平 年 並	平 年 並
		黒腐病	やや遅い	平 年 並
		軟腐病	平 年 並	平 年 並
		黒すす病	平 年 並	やや多い
		アブラムシ類	平 年 並	平 年 並
		コナガ	平 年 並	平 年 並
	キャベツ、ブロッコリー、 イチゴ	ヨトウムシ	平 年 並	平 年 並
		ハスモンヨトウ	—	平 年 並

気象予報（抜粋）

1 か月予報（9 月 1 日～9 月 3 0 日：8 月 3 0 日、広島地方気象台発表）

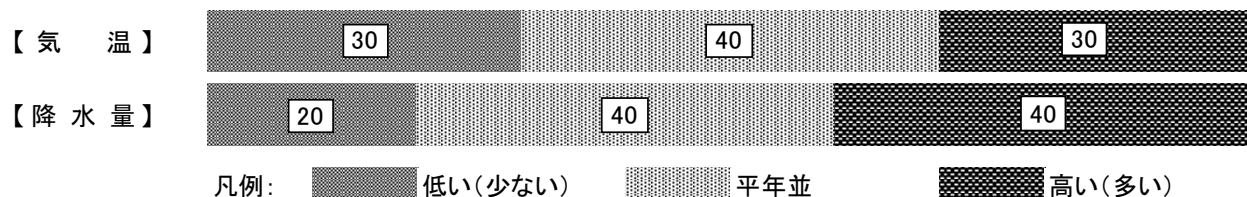
向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

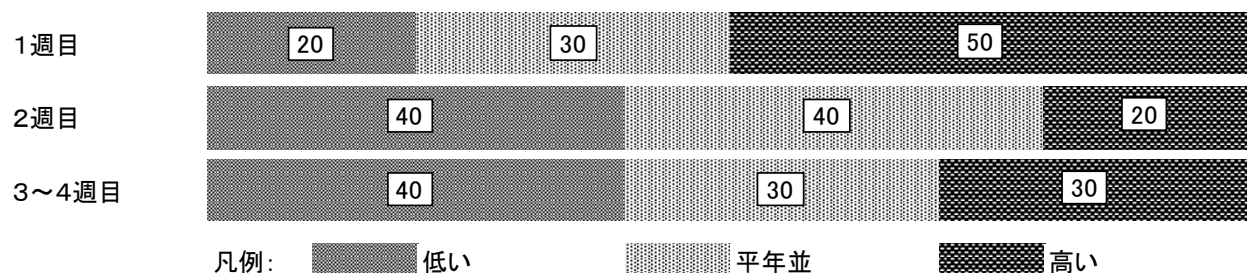
向こう 1 か月の降水量は、平年並または多い確率ともに 4 0 % です。

週別の気温は、1 週目は、高い確率 5 0 % です。2 週目は、平年並または低い確率ともに 4 0 % です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[ダイズ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 9 月 3 日現在、フェロモントラップによる誘殺数は平年よりやや多い。

イ 8 月下旬現在、巡回調査定点のダイズほ場における発生は平年並である。

ウ 向こう 1 か月の気象予報から、本種の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 中齢～老齢幼虫が混在する場合は、ジアミド系殺虫剤を散布すると、比較的效果が高い。

イ 防除の目安は、1 a 当たりの白変葉か所数 3～5 か所以上とする。なお、白変葉の確認にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内でも観察を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における新梢葉の発病葉率は平年並である。

イ 現地ほ場における新梢葉の発病葉率は、平年に比べて高く推移している。

ウ 現地ほ場において、果実での発病が多い園が県東部を中心に一部で認められている。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉の発病増加と花芽への感染を防ぐため、収穫終了後の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤500倍液などを散布する。特に、現在、新梢葉の発病が多い園では、収穫後の薬剤散布を徹底し、病原菌の芽への感染を防ぐ。

ウ 越冬菌密度を下げるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を励行する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期の発病は越冬菌密度の増加につながるので、収穫終了後の薬剤散布を実施する。

イ 薬剤は収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤500倍液またはポリベリン水和剤1,500倍液などを散布する。

ウ 多発園では10～11月に2～3回の薬剤散布を行う。薬剤は、デランフロアブル1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、オキシラン水和剤600倍液、チウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液などを使用する。

エ 異なる品種の混植園などで薬剤散布を行う場合は、薬剤の使用基準（収穫前日数、散布回数など）に注意する。

オ 越冬菌密度を下げるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を励行する。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生量は平年並である。

イ 第1世代ふ化幼虫の発生盛期は平年より早い6月30日（平年：7月5日）

であったことから、第2世代の幼虫ふ化時期は、平年よりやや早い8月中旬～9月上旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期に本種の発生が認められる園では、越冬量が多くなるため、翌年に多発する可能性が高いことから、収穫後の防除を徹底する。

イ 多発園では、収穫終了後にダイアジノン水和剤34の1,000倍液などを散布する。

4 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数は、一部の地点でやや多いものの、全体的には平年並である。

イ 8月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるシンクイムシ類の果実被害は平年に比べてやや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、シンクイムシ類の発生盛期であるため、晩生品種（新高、新興、王秋など）では防除を徹底する。特に、二十世紀などの中生品種で被害が多かったナシ園では、果実被害が懸念される。

イ 薬剤は、シペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤2,000倍液又はイカズチWDG1,500倍液）、テルスターフロアブル3,000倍液、サムコルフロアブル10の5,000倍液、フェニックスフロアブル4,000倍液などを散布する。

5 ハダニ類（カンザワハダニ、クワオオハダニ、ナミハダニ）

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場におけるナミハダニの発生量は、10葉あたりの寄生頭数は0.7頭（平年：0.2頭）と平年に比べやや多かった。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生密度が高い園では、越冬密度を低減させるため、秋期の対策（薬剤散布、紙バンド巻きなど）を徹底する。

[カ キ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年に比べてやや少ない。

イ 昨年の発生量は平年並であり、越冬菌密度も平年並と予想される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 9月にストライド顆粒水和剤3,000倍液、ナリアWDG2,000倍液などを散布する。
- イ 長雨で散布間隔が長くなると発病が増加するため、定期防除を徹底し、降雨前の防除を心がける。
- ウ 発病が認められた新梢や果実は直ちに切除して、園外に持ち出す。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予察の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）における発病は認められていない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 秋期の発病は早期落葉と越冬菌密度の増加につながるので、収穫終了後の薬剤散布を1～2回行う。
- イ 薬剤は、収穫終了後にICボルドー48Qの50倍液などを散布する。なお、無加温ハウス栽培でのビニール除去後及び露地栽培では、散布時に固着性展着剤を加用する。

2 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、黄色粘着トラップにおける捕獲数は、平年に比べてやや多い。
- イ 8月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）における本種による果実被害は平年並の発生量となっている。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発園では、収穫終了後に小粒種ではコルト顆粒水和剤3,000倍液など、大粒種ではパダンSG水溶剤1,500倍液などを散布する。
- イ 9月に発生が増加すると越冬量が多くなり、翌年の発生源となるため、多発園では防除を徹底する。

3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、フェロモントラップにおける誘殺数は、平年並となっている。
- イ 8月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）における本種被害は平年並の発生量である。
- ウ 向こう1か月の気象予報とこれまでの発生経過から、次世代成虫の発生量は平年並で、発生ピークは平年並の9月中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 近年、秋期の気温が高めに推移し、9月以降多発生となるほ場が認められる。秋期の発生は越冬密度を高め、翌年春の発生量の増加を招くため、収穫後であっても注意してほ場を観察する。
- イ 多発園では、収穫終了後にフェニックスフロアブル4，000倍液、サイアノックス水和剤1，000倍液などを追加散布する。

[共通(ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ)]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量 多い

(2) 予報の根拠

平成30年病虫害発生予察注意報第1号(平成30年9月5日発表)を参照のこと。

(3) 防除上注意すべき事項

平成30年病虫害発生予察注意報第1号(平成30年9月5日発表)を参照のこと。

野菜

[ネギ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生時期は平年並だが、発生量はやや多い。
- イ 本病は平均気温25℃前後が発病適温であり、降雨が多い場合に多発する。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 根傷み、肥料不足によって発病が助長されるので、肥培管理に注意する。
- イ 薬剤は、マンゼブ水和剤(ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤など)600倍液、ポリベリン水和剤1，500倍液などを発病初期から散布する。発病が増加する場合は、ロブラール水和剤1，000倍液などを散布する。

2 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、ベストガード粒剤6kg/10a株元処理、アグロスリン乳剤2，000倍液、ディアナSC2，500～5，000倍液などの散布を行う。

3 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、ハチハチ乳剤1, 000倍液、ディアナSC2, 500～5, 000倍液などを7～10日間隔で薬剤を替えて散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数はやや多い。

イ 現地調査ほ場（ネギ）における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ ネギの薬剤は、トルネードエースDF1, 000倍液、スピノエース顆粒水和剤5, 000倍液などを散布する。

ウ ナガイモ（ムカゴを含む）の薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1, 000倍液を用いて防除を行う。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生時期、発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 茎葉の繁茂により薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

ウ 大雨や台風の直後には、天候回復後にできるだけ早く薬剤散布する。

エ 薬剤は、ダコニール1000の1, 000倍液（ムカゴにも登録あり）、ジマインダイセン水和剤400～600倍液、アミスター20フロアブル2, 000倍液などを散布する。

2 ナガイモコガ

(1) 予報の内容

発 生 量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数はやや少ない。
- イ 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生量はやや少ない
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤は、アタブロン乳剤2,000倍液（ムカゴにも登録あり）、トレボン乳剤1,000倍液（ムカゴにも登録あり）、モスピラン顆粒水溶剤4,000倍液（ムカゴにも登録あり）、プレバソンフロアブル5の2,000倍液などを7～10日間隔で2回程度散布する。
- イ 茎葉の繁茂により薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生量は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、コロマイト乳剤1,000倍液（ムカゴにも登録あり）、コテツフロアブル2,000倍液（ムカゴにも登録あり）などを葉裏にも付着するように丁寧に散布する。

[キャベツ、ブロッコリー]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地ブロッコリー調査ほ場において本病の発生は認められない。
- イ 本病は気温が比較的低く、降雨が多いと発生が多くなる。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア キャベツの薬剤は、ヨネポン水和剤500倍液、ダコニール1000の1,000倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤など）400～600倍液、フォリオゴールド800～1,000倍などを予防散布する。
- イ ブロッコリーの薬剤は、フォリオゴールド1,000倍液、レーバスフロアブル2,000倍液などを予防散布する。なお、フォリオゴールドは花蕾形成前までの散布とする。

2 黒腐病

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地キャベツ調査ほ場において本病の発生は認められず、例

年と比べて発生時期はやや遅い。

- イ 本病は、降雨が多い場合や、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすい。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや遅く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため害虫防除を徹底する。
- イ 肥料不足になると多発しやすいため、肥料切れしないよう注意する。
- ウ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待ってできるだけ早く薬剤散布する。
- エ キャベツの薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅パーシン水和剤）1,000倍液、ドキリンフロアブル500～1,000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。
- オ ブロッコリーの薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅パーシン水和剤）1,000倍液、キノンドー水和剤40の800倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

3 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は認められていない。
- イ 本病は、気温が高く、降雨が多いと発生が多くなる。また、台風に伴う風雨によっても発病が助長されやすい。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため、害虫防除を徹底する。
- イ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待ってできるだけ早く薬剤散布する。
- ウ キャベツの薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅パーシン水和剤）1,000倍液、ドキリンフロアブル800～1,000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。
- エ ブロッコリーの薬剤は、ナレート水和剤1,000倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

4 黒すす病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は認められていない。
- イ 本病は、気温25℃付近が発病適温であり、多湿条件下で発生が多くなる。また、降雨と強風により発生が多くなるため、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすい。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待ってできるだけ早く薬剤散布する。

イ ブロッコリーの薬剤は、シグナムWDG 1,500倍液、アフェットフロアブル2,000倍液、アミスター20フロアブル2,000倍液などを散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の育苗期後半～定植当日には、ジュリボフロアブル200倍液、ベリマークSC400倍液などをセルトレイ灌注する。また、定植前日～定植時には、キックオフ顆粒水和剤100倍液をセルトレイ灌注する。

イ 本圃での発生時には、アクタラ顆粒水溶剤3,000倍液、ランネート45DF1,000～2,000倍液、ウララDF2,000～3,000倍液などを散布する。

6 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。

イ 現地調査ほ場における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の育苗期後半～定植当日には、プレバソンフロアブル5の100倍液、ジュリボフロアブル200倍液、ベリマークSC400倍液などをセルトレイ灌注する。また、定植前日～定植時には、キックオフ顆粒水和剤100倍液をセルトレイ灌注する。

イ 本圃での発生時には、トルネードエースDF2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液、アニキ乳剤1,000～2,000倍液などを散布する。

7 ヨトウムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツの薬剤は、ディアナSC2,500～5,000倍液、トルネードエースDF2,000倍液、ファルコンフロアブル2,000～4,000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーの薬剤は、ディアナSC2, 500～5,000倍液、マトリックフロアブル1,000～2,000倍液、ランネート45DF1,000倍液、ファルコンフロアブル4,000倍液などを散布する。

[キャベツ、ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップの誘殺虫数は平年並である。

イ 現地調査ほ場（キャベツ、ブロッコリー）における発生量はやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツでは、ディアナSC2, 500～5,000倍液、アニキ乳剤1,000～2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、トルネードエースDF2,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液、ファルコンフロアブル2,000～4,000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーでは、ディアナSC2, 500～5,000倍液、アニキ乳剤1,000～2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、ファルコンフロアブル4,000倍液などを散布する。

エ イチゴでは、マッチ乳剤3,000倍液、フェニックス顆粒水和剤2,000～4,000倍液、トルネードエースDF2,000倍液などを散布する

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(http://www.famic.go.jp/)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

＜鳥取県病虫害防除所ホームページ＞

アドレス http://www.jppn.ne.jp/tottori/
--

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

＜お問い合わせ＞

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※予報第9号の発表は、10月3日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますのでご注意ください。